

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：聖霊シリーズ

聖霊と聖体の関係（89年9月13日）

「あなたたちは間もなく、聖霊で洗礼を受けるだろう」（使徒行録1・5）とイエズスが約束された御言葉が教えるのは、聖霊と洗礼との特別な連関です。先の考察で学んだように、聖ヨハネが悔い改めの洗礼をヨルダン川で授け、キリストの到来を宣言した時より、「聖霊と火とで」洗礼を授ける御方のもとに私たちは引き寄せられるのです。イエズス御自身が受けられた独特な洗礼そのものにも引き寄せられます。（マルコ10・38参照）それは「永遠の霊によって」キリストが捧げられた十字架の犠牲のことで、「第二のアダムは命を与える霊となった」と聖パウロは述べています。（ヘブライ9・14、コリント①15・45参照）ご存じのように、御復活の当日に、キリストは使徒たちに生命の与え主である聖霊を授与されました。（ヨハネ20・22参照）その後の聖霊降臨の日には、一同が「聖霊で洗礼を授けられました。」（使徒行録2・4参照）

ですから、キリストによる過越の犠牲と聖霊の賜との間には客観的な関係があります。御聖体はキリストの贖いの犠牲を更新するものであることからわかるように、この秘跡と聖霊の賜とは内在的連関があるのです。聖霊は聖霊降臨の日に来臨して教会を創立されましたが、その礎を御聖体との客観的な関係におき、御聖体を中心に組織されました。

イエズスは喩でこう語られました。「天の国は自分の子のために婚宴を催す王のようである。」（マテオ22・2）御聖体は秘跡的な先取りであって、ある意味ではヨハネの黙示録に言う「小羊の婚宴」にあたる王の婚宴の「味見（前味）」でもあります。（黙示録19・9参照）花婿はこの婚宴の真ん中に座り、御聖体的な前兆、先取りの中心に位置して「世の罪を除き給う」神の小羊・贖い主です。

教会は聖霊降臨の洗礼によって生まれたのですが、その時使徒たちが、他の弟子たちやキリストに従う人々と一緒に「霊によって洗礼を授けられる」その教会では、御聖体は、現にキリストの御体と御血の秘跡であると共に、時の終りに至るまでそうであります。

「永遠の霊によって、汚れのないご自分を神に捧げられたキリストの御血」が教会に現存しておられます。（ヘブライ9・14）それは「罪のゆるしを得させるために」「多くの人のために流される」血であり、「私たちの良心を死の業から清め」る血であり、「契約の血」です。（マテオ26・28、マルコ14・24、ヘブライ9・14、マテオ26・28）イエズス御自身が御聖体を制定されるときに「この杯は…私の血による新しい契約である」と言われます。（ルカ22・20、コリント①11・25参照）「私の記念としてこれを行なえ。」（ルカ22・19）

御聖体には、世の贖いのために十字架の上でキリストが一度限り御父に御体と御血を捧げ給うた犠牲が再現されます。『ドミニム・エト・ヴィヴィフィカンテム』（聖霊についての回勅）はこう述べています。「人の子の犠牲において聖霊は現存し、働き給う…イエズス・キリスト御自身が、御自分の人性において自らを余すところなく開示し給い…御苦難によって救済的な愛をほとばしらせ給うたのです。」（『ドミニム・エト・ヴィヴィフィ

カンテム』40)

御聖体はこの贖いをもたらす愛の秘跡で、聖霊の現存と御働きにつながっています。ここで思い出すことは、パンを増やされた後、カファルナウムの会堂で語られたイエズスの言葉です。この時イエズスは、御自分の肉と血を食することが必要であると宣言されたのでした。「人の子の肉を食せず、その血を飲まなければ」というイエズスの主張を聞いた多くの者は「むずかしい話だ」と思いました。その難しさを知ってイエズスは言われました。「そんなことでつまづくのか。それなら人の子が元いた所に昇るのを見たら…。」これはイエズスが将来昇天されることへの明白な言及でした。まさにこの時点で、聖霊のことは御昇天の後でしか十分には理解できない、ということもイエズスは付言されたのです。こう言われました。「生かすのは霊で、肉は何の役にも立たぬ。私の言った言葉は霊であり、命である。」(ヨハネ6・53参照、60～63)

御聖体についてイエズスが最初に宣言されたのを聞いた人たちは「物質的な」意味に理解しました。主はすぐ説明し、この言葉は、命の与え主である「霊」によってのみ明確に理解できると仰せになりました。御聖体によってキリストは、御自分の肉と血を食物と飲物としてお与えになりますが、それは最後の晩餐の場合と同じく、パンとぶどう酒の形色(外観)の下にです。命の与え主である霊によってのみ、御聖体の食物と飲物は私たちに「聖体拝領」すなわち、十字架にかけられ栄光に入られたキリストとの救済的一致(救いに導く一致)をもたらすのです。

聖霊降臨の出来事に関連して意義深い事実があります。聖霊降臨の後のごく早い時期から、使徒たちと主に従う人たちは、回心し受洗して「パンを裂くこと、祈りをすることに専念していた」がそれはあたかも聖霊御自身が彼らを御聖体の方へ連れて行ってくださった結果のようであったのです。(使徒行録2・42) 回勅『ドミヌム・エト・ヴィヴィフィカンテム』で私はこう申しました。「聖霊に導かれて、教会はそもそもの始めから、そのアイデンティティーを表現し、確認するのに御聖体をもってしてきた。」(『ドミヌム・エト・ヴィヴィフィカンテム』62)

初代教会は使徒の教えに基礎をおいた共同社会で、これを完全に活性化した聖霊は信者を啓発して御言葉を理解させ、愛をもって御聖体の周りに集まらせました。こうして教会は成長し「心と霊を一つにしていた」信者の群れとなったのです。(使徒行録4・32)

先に引用した回勅にこうあります。「御聖体によって、慰め主なる勧告者(聖霊)の御働きで、個人も共同社会も人間の生命の神的な意味を発見できるようになる。」(『ドミヌム・エト・ヴィヴィフィカンテム』62) 人々は内的生活の価値を発見し、自分の中に三位一体の神のイメージを認識します。三位一体については新約の各書にいつも出てきます。とくに聖パウロの書簡では私たちの生命の始めであり終りである、つまり人が創造され形成される原理であると共に、子なる御言葉、聖霊なる愛に反映されている御父の御旨と御計画に方向づけられ、導かれていく最終目的であると示されています。この美しく深遠な解釈は教父の伝統であり、聖トマスが神学的に要約し定式化してキリスト教的霊性と人類学の重要原理としたのです。(『神学大全』 I q. 93a. 8)

エフェゾの信徒への書簡にはこう表現されています。「さて私は主イエズス・キリスト

の父の御前にひざまずこう一父から天と地の全ての家族が起ったからである—キリストが、その光栄の富に従って、その霊によって、あなたたちの内の人を力強く固めてくださることを、また、愛に根ざし愛に基を置くあなたたちの心に、信仰によってキリストが住まわれるようにと願う。あなたたちは全ての聖徒とともに、かの奥義の広さと長さで深さとを理解する力を受けるであろう。あなたたちは計り知れぬキリストの愛を知り、満ち満ちる神によって満たされるであろう。」（エフェゾ3・14～19）

この神性の満ちあふれを私たちに与えてくださるのはキリストであり、それは聖霊の御働きによるのです。（コロサイ2・9～10参照） こうして神的生命に満たされ、キリスト者は全的キリスト（キリスト全体）すなわち教会の満ちあふれの中に入り、次第に建設される新しい宇宙の中に教会によって生きるのです。（エフェゾ1・23、4・12～13、コロサイ2・10参照） 教会の中心に御聖体がおられ、キリストの人類と全世界における現存と御働きは聖霊によるのです。

信仰の光と影（90年7月4日）

少年イエズスの知恵と恩寵を垣間見せるものの一つに神殿での博士たちとの問答の場面をあげることができます。ルカはこのことを、イエズスが神と人との前に成長していく様子を記した文にはさんで語っています。そこでは、聖霊についてはっきりとは触れていませんが、聖霊の活動は一連の出来事の中で際立って輝いているようです。事実、福音史家は「聞いている人々は、その子の知恵と答えとを不思議がっていた」と記しています。（ルカ2・47） 人々は、天から授けられたとしか思えない、つまり聖霊に賜ったとしか思えない知恵に驚いています。

イエズスを探して三日目に、やっと神殿で学者たちの中におられるのを見つけた両親が、イエズスに尋ねた問も深い意味があります。マリアは「私の子よ、なぜこんなことをしたのですか。ごらん、お父さんと私は心配して探していたのですよ」と愛情をこめて咎められました。イエズスはマリアに「なぜ私を探したのですか。私が私の父の家にいるはずだと知らなかったのですか」と穏やかな口調で反問されました。（同2・48～49） この「知らなかったのですか」という問を聞くと、マリアが神殿でその子イエズスを捧げた時、シメオンがすでに預言していた言葉と関係があることに気付くでしょう。そこには将来の別離、すなわち母の心が初めて剣で貫かれることを告げています。聖霊に満たされた義人、老シメオンの言葉は今再び、人々の間に響き渡ります。12年前シメオンの言葉が聞こえたのと同じ神殿においてです。

しかし、イエズスの答えは神の独り子であることを十分意識し、「自分の務めは父の家、すなわち神殿で父のみわざを行なうことだ」ということを（この訳も可能である）はっきり表すものでした。こうして、おそらく初めて公に自分がメシアであること、他ならぬ神であることを明らかにされました。この出来事は、優れた知性と叡知によってなされたものですが、その力は聖霊によって神の言葉に結ばれたイエズスの中に注がれたのです。その時イエズスは、聖霊に満ちたものとして語られました。

マリアとヨゼフには「イエズスの言われたことがわからなかった」という事実ルカは

注目を促しています。(同2・50) この二人が見、そして驚いたという事実は、二人が「闇に包まれていた」ことを示しています。その後も二人はその状態に留まっていました。しかし、彼らが受肉と贖いの神秘を目のあたりにしていたということをもっと考慮に入れねばなりません。彼らとその神秘に深く関係していたからといって、それを理解していたということにはなりません。二人もまた、信仰の光と影の中にいたのですから。マリアは信仰の巡礼における最初の方でした。彼女は最も多くの光を受けた方でした。しかし同時に、他の誰よりも神秘を受け入れるか否かの試練に立ち向かうべき方でもありました。神の計画に忠実であろうとすることは彼女の務めであったため、じっと心の中で神の思召しを崇め黙想していました。事実「その母はこれらの記憶をみな心におさめておいた」とルカは記しています。(同2・18～19)

私たちには、マリアが心を開いてささやいた言葉が聞こえてくるようです。それはルカと初代教会にとって「マリアの啓示」と呼ぶべき言葉です。今日、私たちはルカと初代教会を通して「少年時代のイエズスの福音」を受けています。それはマリアがずっと記憶に留め、理解に努め、とりわけ心におさめ、堅く信じていたものでした。マリアは神秘に共にあずかりながら、ただ消極的に受け入れ守るだけでなく、自らも精一杯努力しました。「シンバレイン」というギリシャ語が文字通り「比較し組み立てる」ことを意味するように、イエズスの言葉の意味を深く考えていたのです。マリアはイエズスの言葉と出来事を関連づけて、その意味を把握しようと懸命に努力しました。

この内面を見つめ理解しようとする深い黙想は、聖霊の働きを受けてなされました。マリアは(聖霊の)光にあずかった最初の方でした。のちに主が、「弁護者すなわち父が私の名によって送ったもう聖霊は全てを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう」といって弟子たちにお約束になったあの聖霊のことです。(ヨハネ14・26) キリストの言葉の意味と大切さを教会と信者に理解させる聖霊はすでにこの時マリアの上に働きかけていました。「みことばの御母」であるマリア、「上智の座」「聖霊の花嫁」であり、イエズスの出生に関する福音の使者・最初の仲介者であるマリアは、すでに聖霊の働きを受けておられたのです。

ナザレトでのその後の生活中も、マリアは我が子イエズスと彼の身に起ったすべてのことを記憶に留め、じっと静かに考えをめぐらしました。おそらく、誰にも心を打ち明けられなかったでしょう。ほんのわずかな特別な時にしか、息子の語る言葉、息子の投げる眼差しの意味を捉えることができなかったことでしょう。しかし、聖霊は決して彼女のもとを離れず、絶えず働きかけ、彼女が見たり経験したことを、心の奥深くで思い出させました。マリアの記憶は上からの光によって照らされていました。その光がルカの福音書のもととなっています。その書の中では、マリアがイエズスの言葉やみわざを大切に守り、深く考え及ぼした事実、すなわち聖霊のおかげで彼女がすべての出来事をまとめて考察し、イエズスの言葉とみわざのより深い意味を悟ることができたことを力説しています。そうすることによって私たちは今日、理解を深めることができるよう望まれているのです。

このように、マリアは間違いなく神を信仰する人々の模範であると思われます。自ら喜んで聖霊に導かれたいと願い、良い土地に蒔かれた種のように神の啓示を受け入れ、その

啓示を理解しようと努め、キリストの神秘の深淵に到達しようとする人々の手本はマリアなのです。

聖霊は使徒的絆を守る方（91年1月9日）

「キリストのからだ」の魂である聖霊の御働きを説明する中で、聖霊が教会の一性、聖性、公（普遍性）の源泉であり、原理であることを考察してきました。「一、聖、公、使徒継承」を使徒信経の中で宣言しますが、今回は、聖霊が、教会の四番目の特徴であり特性である「使徒継承」の源泉であることについて考えてみましょう。聖霊のおかげで教会は「使徒継承」なのです。聖パウロが言っているように、教会が、キリスト自身を隅の親石として「使徒の土台の上に建てられて」いるからなのです。（エフェソ2・20）これは、聖霊論に照らして見た教会論の大変興味深い点です。（エフェソ2・22参照）

聖トマス・アキナスはこれを使徒信経に関するカテケージスで強調しています。「『すでに置かれているイエズス・キリスト以外のほかの土台を、だれも置くことはできぬ』と聖パウロがコリント人に宛てた書簡で断言しているように、教会の第一の土台はキリストである。しかし、第二の土台がある。それは使徒たちとその教えである。それゆえ、教会は使徒継承であるといわれる。」（『使徒信経解説』第9項）

このアキナスのテキストは、教会の使徒継承に関する聖トマスや中世の考え方を証言するとともに、教会の土台がキリストと使徒とのつながりであることを思い起こさせます。このつながりは聖霊によって生まれました。これが示すのは使徒継承についての神学上の真理であり、啓示された真理ですが、この使徒継承の始まりと源は、真理における一致（交わり）の創始者、つまり聖霊なのです。そしてその真理は、使徒たちをキリストに結び、使徒たちの教えを通して、各世代のキリスト信者と教会を、歴史を通してキリストに結びつけます。

私たちは幾度となくイエズスが最後の晩餐で弟子たちに言われたことを繰り返してきました。「弁護者すなわち父が私の名によって送られたもう聖霊は、全てを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう。」（ヨハネ14・26）キリストが受難の前に話されたこの言葉はルカが記す使徒行録の中で完結しています。イエズスは「聖霊によって選ばれた使徒たちに訓戒をしてのち、天に昇られた。」（使徒行録1・2）

また、使徒パウロは自ら死に直面しつつ、ティモテオに書き送っています。「私たちの内に住まわれる聖霊によって、ゆだねられたよいものを守れ。」（ティモテオ②1・14）それはペンテコステの日に降臨された聖霊、使徒たちとその共同体を満たされる聖霊、世代から世代へと教会の中で信仰が継承されるのを保証される聖霊、使徒の後継者が、パウロが言うように、キリストによって示された真理の「偉大なる遺産」を守るのを助けてくださる聖霊なのです。

使徒行録には、聖霊論の面から教会が使徒継承であることを理解できる記述があります。使徒パウロは「霊に強いられて」、エフェソで福音を聞いた人々がパウロの顔をもう見ないであろうことを感じてエルサレムに行き、その町に集まった教会の長老たちに語りまし

た。(使徒行録20・22、25) 「あなたたちは自分と群れ全体に気をつけなさい。聖霊は神が御血をもって贖われた教会を牧するために、あなたたちを教会の監督と定められたのです。」(同20・28) 「司教」は監督官、指導者を意味する言葉で、牧者のことです。使徒が伝える真理の土台の上に留まっている間、パウロが予感するように、使徒たちの教えから弟子たちを引き離そうとして「有害なこと」を広める人々が真理を歪め、脅すことでしょう。(同20・30参照) そこでパウロは、気をつけて自分の群れを守れ、と牧者に言っています。聖霊が彼らを「司教」として群れに送られるのですから、聖霊が司教たちを支えられることをパウロは確信しているのです。使徒の後継者に、使徒たちがキリストから受けた真理を守る力と素質を与えてくださる御方、神の民のために真理を守り、また神の民がその真理に堅忍するよう保護なさるのは聖霊であると確信していたのです。

使徒たちとその後継者は、キリストの真理を守る仕事のほかにそれを証言する義務を担っていますが、聖霊の助けを得て初めてその仕事を成し遂げることができるのです。御昇天の前にイエズスは使徒たちに「あなたたちはエルサレム、全ユダヤ、全サマリア、地の果てまで私の証人となるであろう」(同1・8)と言われました。これは使徒たちをキリスト御自身の使命に結びつける召し出しです。黙示録はそのキリストを「忠実な証人」(黙示録1・5)と呼んでいます。事実、使徒たちのための祈りの中でキリストは御父に言われました。「あなたが私をこの世に送られたように、私も彼らを世に送ります。」(ヨハネ17・18)そして、復活の夜の御出現の時、キリストは聖霊の息を吹きかける前に、弟子たちに言われました。「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。」(同20・21)

しかしキリストの使命を続ける使徒たちの証言は、キリストを証しする聖霊と強く結ばれました。「私が父からあなたたちに送る弁護者、父から出る真理の霊が来るとき、それが私について証明されるであろう。あなたたちも私を証明するだろう。あなたたちは初めから私と共にいたからである。」(同15・26～27)最後の晩餐でのイエズスのこの言葉は、御昇天の前に使徒たちの耳に再び響きました。その時キリストは、死と復活の永遠の計画を明かして言われたのです。「その御名によって…諸国の民に、罪のゆるしを得させる悔い改めが述べ伝えられる…あなたたちはこれらのことの証人である。私は父の約束されたものをあなたたちに送る。」(ルカ24・48～49)そして、「聖霊があなたたちの上に下り、力をお与えになる。あなたたちは…私の証人となるであろう」(使徒行録1・8)と。これが聖霊降臨の約束でした。ただし、歴史的な意味による約束であるだけでなく、使徒たちの証言の内的意味・神的意味における約束でした。従って教会の使徒継承の約束だったのです。

使徒たちは、十字架につけられ復活されたキリストの「証人となる」ことによって聖霊と結ばれることに気づいていました。ペトロと使徒たちの大司祭への答えがそれを明確に示しています。大司祭は彼らを黙らせ、キリストについて語らせないようにしました。「私たちの先祖の神は、あなたたちが木につけて殺したイエズスをよみがえらせたまいました。神は悔いと罪のゆるしをイスラエルに与えるために、右の御手をもって、イエズスをかしらとし救世主として上げられました。私たちはこのことの証人です。そして神が御自分に従うものに与えたもう聖霊もまたその証人です。」(使徒行録5・30～32) 教会も

その発展の歴史を通して、キリストの証人となる時、いつも聖霊が共にいてくださることを知っています。民の限界ともろさを知り、またパウロがミレトでの別れの時「司教」に勧めた警戒を怠ることなく努力する教会は、主から受けた教えを間違えることなく宣言できるように聖霊がいつも守ってくださることを知っています。第二バチカン公会議は次のように言っています。「神なるあがないの主は、ご自分の教会が信仰と道德に関する教義の決定に際して不謬であることを望まれたがこの不謬性は、たいせつに守られ忠実に説明されなければならない。」（『教会憲章』25）この憲章は、司教団、特に使徒の後継者であり、聖霊によって使徒たちから受け継いだ真理を守る人であるローマの司教に、どういう風にして不謬性が及ぶかを明らかにしています。

聖霊は使徒継承に命を与える源です。聖霊のおかげで教会は、歴史の各時代を通して、常に同一の福音を保ちながら、もろもろの文化と文明の中に根をおろしつつ、世界に広がって行くことができます。第二バチカン公会議の教令には次のように記されています。「キリストは、父のもとから聖霊をおつかわしになった。聖霊は、その救いのわざを内面から働きかけ、教会を独自の発展へと推し進める。…主イエズスご自身、世のために進んで命を捨てられる前に、使徒的役務の定め、聖霊の派遣を約束された。こうして救いのわざにおいて、いずこにても、いかなるときにも効果を得ようと使徒的役務と聖霊とを結び合わされたのである。あらゆる時代に…教会の諸施設に対しては、聖霊がその魂であるかのようにそれらを生かし、信者の心にはキリストご自身を動かしたあの同じ宣教精神を注ぎこまれる。」（『教会の宣教活動に関する教令』4）

さらに『教会憲章』は強調しています。「キリストから使徒たちにゆだねられたこの神的使命は、世の終わりまで続く。（マタイ28・20参照）なぜなら、かれらが伝えるべき福音は、教会にとって、あらゆる時代を通して全生活の源泉であるからである」と。（『教会憲章』20）

聖伝の守り手（91年1月16日）

使徒たちとその後継者を通してキリストが啓示された真理の意味と生命の価値についてさらに理解を深める時、教会の使徒継承は牧者と信者双方に属するといえます。それは神的起源をもつ真理で、人間の洞察力や精神力をはるかに越えているため、類比を用いて人間の言葉で話しかけられる神の御言葉の力を通してのみ、理解し、説き教え、信じ、忠実に従うことができます。単なる人間的権威だけでは、正真正銘の真理伝達と教会の使徒継承という特徴の深い面を保証するのに不十分です。第二バチカン公会議が宣言している通り、聖霊がこの信憑性を守ってくださいます。

『神の啓示に関する教義憲章（デイ・ヴェルブム）』によれば、イエズス・キリストは、「真理の霊の派遣によって、神がわれわれを罪と死のやみから救い、永遠の生命に復活させるため、われわれとともにいるという啓示を完全に成し遂げそして神的なあかしをもって確証」されました。（『啓示憲章』4）ここに述べていることは、福音史家ヨハネが記す高間でのキリストの弟子たちへの話の中で明かされています。「私にはまだあなたたちに話したいことがたくさんあるが、今あなたたちはそれに耐えられぬ。だが、その方つま

り真理の霊の来るとき、霊はあなたたちをあらゆる真理に導かれるであろう。それは、自ら語るのではなく、聞いたことを語って未来のことを示されるであろう。」（ヨハネ16・12～13） 聖霊の光を受けて使徒たちとその後継者は「あらゆる真理」を語り、「諸国の民に教え」る使命を担いました。（マテオ28・19参照）

『神の啓示に関する教義憲章』は続いて述べています。（福音を述べ伝えよという）命令は「キリストのことばを聞き、キリストとともに生活し、そのわざを目して知ったこと、あるいは聖霊の示唆から学んだことを説教と模範と制度をもって伝えた使徒たちによっても、また同じ聖霊の靈感により救いの知らせを書き物にした使徒たちとその回りの人たちによっても、忠実に遂行された。」（『啓示憲章』7） ここで憲章は、靈感と神の助けを受けて新約聖書となった書き物と口述伝達（聖伝の源）の示す真理が、聖霊によって確証され保証されるといっています。

そしてさらに続きます。「福音の生きた声は聖霊によって教会に、また教会によって世界に響き渡り、そして聖霊は、信ずる者をすべての真理に導き、かれらのうちにキリストのことばを豊かに宿らせるのである。」（同8） したがって「聖書は、聖霊の靈感によって書かれたものとしての神のことばである。そして、聖伝は、主キリストと聖霊から使徒たちに託された神のことばを余すところなくその後継者に伝え、後継者たちは、真理の霊の導きのもとに、説教によってそれを忠実に保ち説明し、普及するようにするものである。」（同9）

さらに「神のことばを正しく解釈する役目は、キリストの名で権威を行使する教会の生きた教導権だけに任せられている。しかし、この教導権は…神の命令と聖霊の援助によって、神のことばを敬虔に聞き、聖く保存し、忠実に説明し、そして信ずべき神の啓示として示すすべてのことを、信仰のこの唯一の委託物からくみとるのである。」（同10）

このように、聖書と聖伝と教会の教導職は、互いに堅く結ばれています。聖霊は、この親密なつながりを通して、啓示の伝達を保証し、教会の信仰の同一性を守ってくださるのです。

とりわけ、聖書に関して憲章は次のように述べています。「とうとき母なる教会は、旧約および新約の全部の書をそのすべての部分を含めて、使徒的信仰に基づき、聖なるもの、正統的なものとしている。なぜならばそれらの書は、聖霊の靈感によって書かれ神を作者とし、またそのようなものとして、教会に伝えられているからである。（ヨハネ20・31、ティモテオ②3・16、ペトロ②1・19～21、3・15～16参照） 靈感を受けた作者…が断言していることは、聖霊から断言されたこととすべきである。（同11） それゆえ「聖書は、それが書かれたのと同じ霊の光のもとに読まれ、解釈されなければならない。」（同12）

「実際、使徒たちがキリストの命令に従ってのべたことを、後に使徒たちとその回りの人たちが聖霊の靈感によって信仰の土台として、書いて我々に伝えた。それが、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書である。」（同18）

「使徒たちは、主の昇天後、キリストの栄えあるできごとに教えられ、真理の霊の光に照らされ、聴衆に伝えていた。」（同19）

聖霊と、啓示と、神の真理の伝達との密接なつながりは、教会の使徒的権威と、教会が

私たちに伝える（神の）言葉に対する信仰の決定的な土台となっているのです。さらに聖霊は、公会議も述べているように、一人の人の内なる信仰の誕生においても働かれます。まことに「啓示する神に対しては『信仰の服従』を示す必要がある。（ローマ16・26参照、1・5、コリント②10・5～6）これによって、人間は『啓示する神に対して、知性と意志の全き奉獻』をなし、また神から与えられた啓示に自発的に同意して、自由におのれをまったく神にゆだねるのである。このような信仰を起こすには、神の先行的かつ援助的恩恵と聖霊の内的助力が必要である。聖霊は、人間の心を動かして、神に向かわせ、精神の目を開いて、すべての者に、真理を受け入れること、そして信ずることの甘美さを味わわせる。同じ聖霊は、啓示についての理解がますます深くなるよう、不断にそのたまものをもって信仰を完全なものにする。」（同5）

それは、教会全体の信仰、信者一人ひとりの信仰の問題であり、また、聖霊の御力によって信仰からあふれでべき神の啓示に対する適切な「理解」の問題、「信者の黙想と研究」による信仰の「発展」の問題でもあるのです。事実、聖伝について、公会議は次のように述べています。「使徒たちから出る聖伝は、教会において聖霊の援助によって進歩する。実際、伝えられた事物やことばに関しては、それを心の中で思いめぐらす信者たちの黙想と研究によっても、あるいはまた、司教職の継承とともに真理の確かなたまもの（カリスマ）を受けた人たちの説教などによっても、その理解が深くなる。」（同8）さらに聖書に関して述べています。「神の靈感によって、永久に一度書かれて、神自身のことばを変わることなく伝え、そして預言者や使徒たちのことばの中に聖霊の声を反響させている。」（同21）それゆえ「託身のみことばの浄配、すなわち聖霊から育てられた教会は、聖なることばをもって常におのがこどもたちを養うために、聖書をますます深く理解するよう努力している」と。（同23）

教会は、「聖書を常に尊敬し」「命のかて」として「聖書によって養われ」、「聖伝とともに聖書をおのが信仰の最高の基準と考え」ます。（同21）「自分に神のことばが成就するまで、時代の推移に伴って、絶えず、完全な神的真理を目ざして進む」（同8）教会は、聖霊によってその全生命を生き生きとさせ、聖霊を通してキリストの栄光ある来臨を祈願します。黙示録に記されているように、霊と花嫁は「おいでください」と言うのです。（黙示録22・17）真理の充満を目ざして進む教会において、聖霊は、啓示の伝達を導き保証し、教会と教会のすべての者を、主の最後の来臨に備えさせてくださるのです。

聖霊と七秘跡（91年1月30日）

一、聖、公、使徒継承の教会の真理の源であり、生命の与え主なる聖霊は、秘跡生活の源でもあります。その秘跡を通して、教会はキリストの御力を受け、その聖性にあずかり、その恩寵に養われ成長し、永遠に向かう旅路を歩みます。みことばが人となられた時に働かれた聖霊は、キリストが制定され、教会内で行なわれる全ての秘跡においても働いておられます。キリストが、人々に「新しい命」を与え救いのみわざの協力者として教会を御自分に結び合わされたのも、秘跡を通してなのです。

今日は秘跡の本質、特性、範囲については説明しません。神がお望みなら他の機会に扱

いたいと考えています。

「秘跡は我々の救いのためにキリストが制定してくださった恩寵の手段である」という昔のカトリック要理の簡潔な文句（公式）を思い出すことができます。また聖霊は創始者であり、執行者、キリストの恩寵の息吹であると復唱することもできるでしょう。そこで今回は、福音書にそって一つひとつの秘跡と聖霊とのつながりについて考えようと思いません。

このつながりが明白なのは、特に洗礼の秘跡においてです。ニコデモとの会話の中で、イエズスは洗礼を「水と霊によって」生まれることと表現しておられます。「肉から生まれた人は肉で、霊から生まれた人は霊である。上から生まれねばならぬ。」（ヨハネ3・5～7）

すでに 洗礼者ヨハネはキリストのことを「聖霊で洗礼を受ける者、聖霊と火によって洗礼を受けられる」方であると宣言していますし、使徒行録や使徒たちの手紙にも様々な表現で記されています。（ヨハネ1・33、マテオ3・11） 聖霊降臨の日、人々は「悔い改めなさい。おのおの罪のゆるしを受けるために、イエズス・キリストのみ名によって洗礼を受けなさい。そうすれば聖霊の賜を受けるでしょう」と言うペトロの勧めを聞いた、と記されています。（使徒行録2・38） また、パウロは手紙で、救い主イエズス・キリストの注がれた「聖霊による一新と再生の洗い」について話し（ティト3・5～6参照）、洗礼を受けた者には「主イエズス・キリストのみ名により、私たちの神の霊によって自分を洗い、そして聖とされ、そして義とされ」ること、また「一つの体となるために一つの霊によってみな洗礼を受け、そして一つの霊を注がれた」ことを思い出すよう勧めています。（コリント①6・11、12・13） 福音書と同様パウロの教えでも、洗礼を宣言し、授与し、聖化と救いの源、つまりイエズスがニコデモに語られた新しい命の源としての洗礼について述べるにあたり、聖霊とイエズス・キリストの御名が関連づけられています。

使徒行録には、按手によって使徒たちが聖霊の賜を与えたと記されている通り、洗礼に続いて行なわれる堅信は、按手の形で授けられると記されています。ペトロとヨハネが洗礼を受けたばかりの人に、「按手すると聖霊が下った」のです。（使徒行録8・17） 使徒パウロの場合にも、新たに洗礼を受けた者に同じ事が起こりました。「パウロが按手すると聖霊は彼らのうえに下った。」（同19・6）

信仰と秘跡を通して私たちは「主において約束の聖霊のしるしを受け、聖霊は私たちの世継の手金」となります。（エフェソ1・13～14） パウロはコリント人に宛てて「あなたたちとともに私たちをキリストにおいて固め、私たちに油を注がれたのは神である。神は私たちの上に判を押し、私たちの心に霊の手金を与えられた」と書き送り、あがないの日のためにしるしを与えられたその聖霊を悲しませないように、とエフェソ人に忠告を送っています。（コリント②1・21、22、ヨハネ①2・20、27、3・24参照、エフェソ4・30）

このように使徒行録を読めば、堅信の秘跡が「主イエズスのみ名によって」洗礼を受けた後、按手によって授けられることがわかります。（使徒行録8・15～17、19・5～6参照）

赦し（告解・悔悛）の秘跡と聖霊のつながりは、復活後のキリストの言葉によって確立されました。それはヨハネが証明している通りです。イエズスは使徒たちに息を吹きかけ

て「聖霊を受けよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない」と言われたのです。（ヨハネ20・22～23）この言葉は、病者の塗油の秘跡に当てはめることができます。ヤコボの手紙は次のように記しています。長老たちが「主のみ名によって」油を塗ってから唱える「信仰による祈りは、病気の人を救う。主は彼を立たせ、もし罪を犯しているならそれを赦されるであろう」と。（ヤコボ5・14～15）キリスト教の聖伝によると、この塗油と祈りが秘跡の原型だと考えられてきました。（聖トマス・アクィナス 『異教大全』 IV, C. 73）トリエントの公会議もこれを認めています。（『カトリック教会文書資料集』 DS 1695 参照）

聖体の秘跡と聖霊のつながりは、新約聖書ではヨハネの福音書がほぼ直接的にこの点に触れています。そこでは、イエズスがカファルナウムの会堂で御体と御血の秘跡の制定について話された時の様子が詳しく記されています。「生かすのは霊で、肉は何の役にも立たぬ。私の言ったことばは霊であり命である。」（ヨハネ6・63）みことばにも秘跡にも、聖霊から受けた生命と効力が備わっているのです。

聖伝も聖体と聖霊のつながりを伝えていきます。それはミサの中でずっと唱えられている通りです。奉献文の祈りの中で教会は、祭壇の上に捧げる供え物を「聖霊によって」（第三奉献文）尊いものにしてください。「いま聖霊によって」（第二奉献文）「このとうとい供えものを受けいれ 祝福してください」（第一奉献文）と祈ります。教会は、聖変化の実現 パンとぶどう酒がキリストの御体と御血に秘跡のうちに変化すること、この共同体に属する全ての人に恩寵が与えられることにおいて働かれる聖霊の驚くべき御力を強調します。

次に叙階の秘跡ですが、パウロは按手によって受ける「カリスマ」（聖霊の賜）について語っています。（ティモテオ①4・14、②1・6参照）そして司教を「定め」るのは聖霊にほかならないと言っています。（使徒行録20・28参照）パウロの他の手紙や使徒行録でも、聖霊とキリストの聖務者（役務者）つまり使徒たちとその協力者とさらにその後継者（司教、司祭、助祭）は、使命を受け継ぐだけでなく、カリスマを受け継ぐという特別な関係にあることが証言されています。

最後に、婚姻の秘跡、パウロが「この偉大な奥義…私がそう言うのはキリストと教会についてである」という秘跡について考えましょう。（エフェソ5・32）この秘跡によって、キリストの御名のうちに、キリストを通して、命と愛の共同体となる男女二人の間で誓約が成立します。この秘跡において「聖霊によって、この心に注がれた」（ローマ5・5）神の愛に、人間が参加するのです。聖アウグスティヌスによれば、神において御父と御子と「一致」である聖三位一体の第三のペルソナは、婚姻の秘跡を通して、男と女の間（ペルソナ）としての「一致（交わり）」を形づくられるということです。（『三位一体』 VI, 5. 7, PL 42, 928）

このように、教会の秘跡生活において聖霊が現存し、働かれるということ、聖書と聖伝、特に秘跡の典礼に基づいて簡単に見ましたが、このすばらしい教理をさらに深めるために、秘跡にたびたびあずかるように勧めたいのです。それは、聖霊に従順で、忠実であることの表れです。教会が「イエズス・キリストによって制定された救いの手段」を通し

て、全世界の贖いのために働くことを実現させてくださるのは聖霊にほかならないのです。

聖霊の賜 新しい生命の源 (91年4月3日)

魂への客人である聖霊は、キリストを信じる者とキリストがわかち合われる新しい生命の源です。新しい生命とは〈霊の法〉に従う生命であり、原罪以来人間の内に働く罪と死の力に、復活の力をもって勝つ生命のことです。善に向かおうとする意識と悪の誘惑との戦い、神の法に適おうとする「心」の傾きと人間を罪の支配下に置く「肉」の権力との戦いを体験した聖パウロはこう叫びました。「私はなんと不幸な人間であろう。この死の体から私を解き放つのはだれだろう。」(ローマ7・14～23参照、24)

しかし、彼は恩寵によって贖われるという真理を内なる体験によって知ります。「だから今、キリスト・イエズスに在る者は、罪とせられることがない。キリスト・イエズスにおいて命を与える霊の法があなたを罪と死の法から解放したからである。」(同8・1～2)

それは「私たちに与えられた聖霊によって」(同5・5) 私たちの心に生まれた新たな生命の状態でした。

全てを新たにする力を持つ聖霊が、内側から働きかけてくださるので、全キリスト信者は信仰と愛に生き、徳を実行することができます。聖霊は、私たちを義化し、生かし、聖化する恩寵を与え、それと共に超自然の生命を織り成す新たな徳をも授けられます。聖トマス・アクィナスが説明している通りこの超自然の生命は、知性、意志、感覚という人間に自然に備わっている能力だけでなく、恩寵と共に与えられる新たな能力によっても発展します。(『神学大全』I-II q. 62, aa. 1, 3) 新たな能力は、信仰のうちに真理である神に従う力を知性に与え、愛する力を心に与えます。それはまるで、自分の中で「神の愛である聖霊と一つになる」かのようです。(同 II-II q. 23, a. 3, ad 3) それだけでなく、霊魂にも、ある意味では肉体にも、新しい生命にあずかり、恩寵のうちに神の本性と生命に与るまでに高められた人にふさわしい行ないができるようになるのです。それはペトロが言う通りです。「神の本性にあずかる。」(ペトロ②1・4)

これは新しい内なる体系であり、石板に書かれたのでも筆記されたのでもなく、心に刻まれた法、恩寵の法です。パウロはこの法を、「イエズス・キリストにおいて命を与える霊の法」と呼んでいます。(ローマ8・2参照、聖アウグスティヌス『文字と霊』24、聖トマス・アクィナス『神学大全』I-II q. 106, a. 1)

教会の生命に関わる聖霊の働きについての先の考察で、共同体の発展のために与えられる数々の種類の異なる賜について考えましたが、その賜はキリスト信者一人ひとりにも与えられます。つまりすべての人が実際に具体的に聖霊の賜を受けるのです。人は皆、神の愛によって生命を受け、各々の職務、道、霊的歴史を進んでいきます。

聖霊降臨の日、聖霊は共同体を満たすと共に、一人ひとりの心をも満たしました。聖霊を象徴する風が吹いて彼らの座っていた家に満ち、もう一つの象徴である火のような舌が現れ、おのおのの上に止まった。彼らはみな聖霊に満たされ、一人ひとりの生命のあらゆる面に種々の賜が与えられました。(使徒行録2・2～4)

今回は、カトリック要理と神学が聖霊の賜と呼んでいるものについて簡単に考えます。

全てが賜です。恩寵、本性、さらには創造のすべてがある意味で賜であると言えますが、カトリック要理と神学の用語で聖霊の賜と呼んでいるものは、「神的な方法で」働く能力を与え、超自然徳を完成させるために靈魂に注がれる神のすばらしい力のことです。

(『神学大全』 I-II q. 68, aa. 1, 6)

旧約聖書のイザヤ書に初めて聖霊の賜について証言しています。預言者イザヤがメシアである王について言っています。「知恵と分別の霊、賢慮と強さの霊、知識と主への恐れ
の霊。」そして六番目を繰り返して、王は「主への恐れを喜びとし」た。(イザヤ11・2～3)

ギリシャ語の七十人訳聖書と聖ヒエロニムスのラテン語訳聖書にはこの繰り返しはなく、六番目の「主への恐れ」の代わりに「孝愛」が記され、「知識と孝愛の霊が。彼は敬畏の念で満たされる」と結ばれています。このように恐れと孝愛が重なり合っているのは、前表としての旧約聖書の聖書上の伝承から反れていることの表れではなく、キリスト教神学上、典礼上、要理教育上の伝承において預言をメシアに当てはめ、文字通りの意味を豊かにした結果なのです。ナザレトの会堂でイエズスは、イザヤ書の別の箇所を御自身に当てはめて「主の霊は私の上にある」と仰せられました。(イザヤ61・1、ルカ4・18) それは先に述べたイザヤ書のメシアの預言の書き出し、「その上に主の霊がやどる」と合致しています。(イザヤ11・2) 聖トマスが説明するように、聖霊の賜は「イザヤの書が示すように、キリストの中に在るものとして、聖書に名が揚げられて」いますが、その賜はキリストによって、キリストを信じる者の心にもわかち与えられます。(『神学大全』 I-II q. 68, a. 1 参照)

このように聖書が証言する賜は、超自然的高揚と注入徳の光の下で、人間の靈魂の基本的性質と比較されてきました。中世の神学はこの七つの賜に関して、絶対的な教義上の特質は示さず、賜の数を限定することも、区別するために種類を分けることもしなかったのですが、キリストと聖人たちの数々の賜を理解し、より良い靈的生活を送る上でとても役立ちました。

イザヤ書を案内役として、聖トマスや他の神学者や要理教育者は、賜と靈的生命との関係を説明しています。

[1] 第一の上智の賜を以て、聖霊は、知性を照らし啓示と靈的生命について「至高の認識」を与え信仰とキリスト信者の生活に関して聖パウロの言うように「自然的」「動物的」にではなく、「靈的」に正しい判断ができるよう導きます。(コリント①2・14～15参照、ローマ7・14)

[2] 第二の聡明の賜を以て、聖霊は、神のみことばの高みと深さを直観的に鋭敏に内から悟らせます。

[3] 知識の賜を以て、聖霊は、正確に主の啓示の中身を定め、判断し、神に関することを人間の知識から見分けられるように導きます。

[4] 賢慮の賜を以て、聖霊は、成すべき困難な仕事や選択に直面したとき、迷わず正しく判断できる超自然の力を与えます。

[5] 剛毅の賜を以て、聖霊は、意志を支え、促進させ、前進させ、肉体的、精神的な困難

にあっても耐えることのできる力を与えます。

[6] 孝愛の賜を以て、聖霊は、キリストによって示された御父に対する子の心を表す感情・愛情・思考・祈りを通して、人間の心を神に向かわせます。それによって 人となられたみことばである子と一致し、御母マリアに対して子の心を持ち、天国の天使と聖人に伴われて教会と交わり、「私たちと共においでになる神」の秘義を理解し、それに一致できるようにします。

[7] 敬畏の賜を以て、聖霊は、「奴隷の恐れ」から魂を解放し、愛のうちに生まれる「主の子供としての恐れ」を授け、キリスト信者の心に神の法に対する深い尊敬と、責務を注ぎます。

聖霊の賜に関する教えは、自分自身に指針を与え、人々を導くのにとても大切です。聖霊と絶え間なく会話し、その導きに身を委ねた上で人々を形成しなければなりません。この教えはイザヤ書のメシアの預言に結びついています。イエズスに当てはめると、完全が偉大であることを、キリスト信者の霊魂については、内的生命発展の根本的な点を教えています。すなわち、理解し（上智・知識・聡明）、決断を下し（賢慮・剛毅）、福音に添った正しい生活と祈りで神との個人的交わりに留まり成長する（孝愛・敬畏）ことを教えているのです。

というわけで、旧約聖書から知ることのできる永遠の賜なる聖霊、つまり、創造の全計画との調和のうちに数々の異なる賜を与えてくださるユニークな無限の愛に一致することはまことに大切なことなのです。

聖霊の賜 内的生活の源（91年4月10日）

聖パウロは、「キリスト・イエズスにおいて命を与える霊の法」（ローマ8・2）について教えています。「霊によって生きる」ことを望むなら〈肉〉の行ないではなく霊のわざを実現させるために霊の法に従わなければなりません。（ガラツィア5・25）

パウロは〈肉〉と〈霊〉の対立、そしてそれぞれから生じる相反する行ない、思い、生活を強調しています。「肉に従って生きる人は肉のことを念い、霊に従う人は霊のことを念う。肉の念いは死であり、霊の念いは命と平和である。」（ローマ8・5～6） 肉の行ないや、動物的人間がもたらす精神と文化の退廃を目にするのはとても悲しいことです。しかし、全く異なる生き方、霊に従う生命（生き方）が現実にあることを忘れてはなりません。それは実際にこの世に在り、悪の権力の広がりに対抗しています。パウロはガラツィア人への手紙で、神の国から人を締め出す肉の行ないに対比させて、「愛、喜び、平和、寛容、仁慈、善良、誠実、柔和、節制」である〈霊の実〉があることを述べ、自分の内なる法、すなわち内的生活を導く〈霊の法〉のもとでこれらの実が結ぶと教えています。（ガラツィア5・18～25参照）

イエズスの弟子たちへの言葉からわかるように、超絶的である霊的生命（生活）と、キリスト信者としての行ないの根源が問題となっています。「それは真理の霊である。世はそれを見もせず知りもしないので、それを受け入れない。しかし、あなたたちの中にいます」聖霊は高きより来られ、私たちの内的生活に生命を与えるために、私たちの内に入り

住まわれます。(ヨハネ14・17) 「霊はあなたたちと共に住んでいる」、近くにおられるばかりか、私たちの内に住んでおられる、とイエズスは仰せになります。(前出) 御父が「霊によってあなたたちの内の人を力強く固めてくださる」ことをパウロはエフェソ人への手紙で願いました。(エフェソ3・16) 人間にとって価値あるのは外的、表面的な命を生きることではなく、すべてを見通す聖霊によって示される〈神の深み〉のなかに住むことなのです。(コリント①2・10) パウロが示す〈動物的な〉人間と〈霊的な〉人間の区別を考えれば、霊魂の能力の自然な成長と、霊的生命の広がりに伴うキリスト信者としての成長、つまり信仰、希望、愛における成長とは異なることがわかります。霊魂の内から発し、外的、社会的な命にまで広がるこの神がお与えになる霊的生命を知ることが、キリスト教人間学の根本であり、最高の見地です。信仰の真理を土台とした知識であり、それによって聖霊が私の内に住み、取り次ぎ、導き、キリストを私の内に生かしてくださることが信じられるのです。(コリント①3・16、ローマ8・26、8・14、ガラツィア2・20)

イエズスは「ヤコブの泉」の傍らで、信じる者に与えられる生きる水についてサマリアの女に話されました。「その人の中で、永遠の命にわき出る水の泉となる」水は、霊的生命の内なる泉なのです。(ヨハネ4・14) 「ユダヤ人の幕屋祭」(同7・2参照)の日にイエズス御自身がこれを明らかにされました。イエズスは、立ち上がって大声で「渇く人があれば私のもとに来て飲むがよい、私を信じる者は、聖書の言葉にあるとおり生きる水の川がその内から流れ出るだろう」と言われた。イエズスは自分を信じる人々が受けるはずの霊について話されました。(ヨハネ7・37～39)

聖霊は、新たな生命を与える恩寵とその恩寵の力を善の実りに変える徳のダイナミックな働きを、信じる人の内で発展させます。「その方は聖霊と火によってあなたたちに洗礼を授けられる」と洗礼者ヨハネが洗礼について語っているように、また「私は地上に火をつけに来た」とイエズス御自身が救い主としての使命について語っておられるように、信じる者の〈内〉から聖霊は火のように働かれます。(マテオ3・11、ルカ12・49) パウロが書簡の中で、「熱い心を持って」と勧めているその熱情で、聖霊は命を燃え上がらせられるのです。(ローマ12・11) それは、清らかにし、明るくし、燃え立たせ、生き生きとさせる「生きる愛の炎」であると、十字架の聖ヨハネは巧みに説明しています。

信じる者の内で聖霊が働き、もともとの聖性がすばらしく発展しますから、人格が研かれ、高められ、破壊されることなく完成に向けられます。どの聖人にもそれぞれ特徴がありました。パウロが「この星とあなたたちの星の輝きは違う」と言うように、「死者の復活」の時だけでなく、この世においても動物的でなく霊的な人の状態も星の輝きのよう、みな違っているのです。(コリント①15・41、44参照)

聖性は愛の完成にあります。しかし、さまざまな条件のもとで個々の人間の示す様相によって聖性は異なります。聖霊の働きのもとで、一人ひとりが利己主義への傾きを愛で克服し、それぞれに固有な仕方自己を奉獻し、その中で最良の力を育みます。特にその固有性が強くなると、聖霊がその人たちの周囲に、弟子たちとそれに従う人たち(隠れたままであっても)のグループをお作りになります。このようにして、霊的生命の潮流、霊性の学校、神学校が生まれました。神のお働きによって様々なかたちで生まれました。人々

とそのグループ、共同体と学校、司祭と信徒のあらゆる能力を聖霊はお使いになります。

「主の霊のあるところには自由がある」とパウロが言っているとおり、キリスト信者の生活を特徴づける自由の新しい価値は、内なる源から発します。(コリント②3・17) 聖パウロは直接には、キリストの教えとわざに一致してキリストに従う人々が、ユダヤの律法に関して手に入れることができる自由に言及していますが、その論点は一般的な価値を持っています。パウロはしばしばキリスト者の召し出しとしての自由について語っています。「兄弟たちよ、あなたたちは自由のために召された。」霊によって歩む人は肉のくびきのもとにはいず自由をまとっている。「霊によって歩め。そうすれば肉の欲を遂げさせることはない。」(ガラツィア5・13、16) 「肉の念いは死であり、霊の念いは命と平和である。」(ローマ8・6)

〈肉の行ない〉は、自我と感情のままに従う行ないであり、神の国へ入るのを妨げます。キリストを信じる者が霊に忠実に従えば〈肉の行ない〉から解放されるでしょう。聖霊の働きは愛のわざです。「これらのことに反対する律法はない」のです。(ガラツィア5・23) 使徒聖パウロは「もしあなたたちが霊に導かれているのなら、律法の下にはいない」と言い、ティモテオにも明白に語っています。「律法は義人のためにもうけられたのではない」と。(ガラツィア5・18、ティモテオ①1・9) そして、聖トマス・アクィナスもこう説明しています。「律法は、悪人に対する強制力を持つが正義の人に対してはそのような力を持たぬ。」(『神学大全』I-II q. 96, a. 5 ad 1) 義人は律法に反しません。むしろ彼らは聖霊に導かれ、自由に、律法が命じるあらゆることを果たします。(ローマ8・4、ガラツィア5・13～16参照)

これは自由と律法の調和であり、義人における聖霊の働きの実りです。エレミアとエゼキエルは、新しい契約の律法が内的なものであることを預言しています。(エレミア31・31～34、エゼキエル36・26～27参照)

「私はおまえたちのうちに霊を置く。」(エゼキエル36・27) エゼキエルの預言は実現し、今なお、信者と教会共同体の中で生きています。律法の単なる遵守者でなく、自由に熱心に、忠実に神の計画を遂行する者になることを可能にするのは聖霊にほかなりません。「神の霊によって導かれている人はすべて神の子らである。あなたたちは再び恐れに陥るために奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けた。これによって私たちは『アッバ 父よ』と叫ぶ。」(ローマ8・14～15) これが子としての自由です。イエズスはこれを真の自由であると宣言されました。(ヨハネ8・36参照) これが基本的、内的自由です。一つの霊によって私たちが御父に近づかせる愛。これに向かう自由であり(エフェゾ2・18) 諸聖人の命の中で光り輝く導かれた自由なのです。

聖霊の賜 祈りの生活の源 (91年4月17日)

内的生活で最も大切なのは祈りです。霊的指導者はこれを確信しているので、内的生活を祈りの生活と表現します。キリストにおいてそうであったように、この生活を編み出されるのは聖霊です。「イエズスは聖霊によって喜びに身をふるわせながらこう言われた。『天地の主なる父よ、あなたを賛美します。』」(ルカ10・21) これは、「聖霊におい

て」歓喜するイエズスからあふれでる賛美と感謝の祈りでした。

イエズスは、救い主として働かれる間、祈るためしばしば一人になられ、夜中神に祈られました。（ルカ6・12参照） 神と語るために人のいない所を好まれました。そのような所は、神の超越性の秘義に敏感な靈魂が、必要とすることや傾きにすぐに答えてくださる神との語り合いへの準備をしてくれるからです。（マルコ1・35、ルカ5・16参照） 旧約聖書にあるように、モーゼとエリアも同じようにしました。（脱出34・28、列王上19・8参照） 荒地には祈りに必要な靈感が漂っており、神は「荒地につれてゆき、その心に語りかけられる」とホゼアの書には記されています。（ホゼア2・16参照）

イエズスの生涯と同様、私たちの生活においても聖霊は祈りの霊です。パウロは、前に引用したガラツィア人への書簡の中で見事に述べています。「あなたたちが神の子である証拠は、『アッバ、父よ』と叫ぶみ子の霊を、神が私たちの心に遣わされたことである。」

（4・6） 何らかの方法で、聖霊が御子の祈りを私たちの心に移され、その叫びを御子が御父に届けてくださいます。このように祈りにおいて私たちが「養子とされたこと」、キリストにおいて、キリストによって、子とされたことが表明されます。（ローマ8・15参照）

祈りとは、信仰のうちに「私たちが子供であり」「神の世継であり」「キリストと共に世継である」という信仰の真理を告白することなのです。聖霊は「私たちの霊と共に、私たちが神の子であることを証明してくださ」いますから、祈ることによって超自然の生命（現実）にあずかることができます。（ローマ8・16～17）

教会の始めから、キリストに従う人々はこれを信じ、死に臨む時にもその信仰を表しました。最初の殉教者であり、「聖霊に満たされた」人であるステファノの祈りはよく知られています。ステファノは石殺しの刑を受けている間、ちょうど十字架にかけられたイエズスが死刑執行人に言われたように、「主よこの罪を彼らに負わせたもうな」と大声で叫び、キリストと一致していることを証しました。そしてなお祈り続け、神の右に立たれるキリストの栄光を見て「主イエズスよ私の霊をお受けください」と願いました。（使徒行録7・55～60） この祈りは、殉教者ステファノにおける聖霊の働きの実りだったのです。

キリストへの信仰を告白したその他の人々の殉教録にも、ステファノの祈りに表れた内的靈感を見ることができます。殉教録には、福音や使徒たちの書簡を通して形成され、教会の自覚となった、キリスト者の自覚が表れています。

パウロの教えによって、キリスト教的な祈りの作者は聖霊ですが「心は熱しても肉体は弱いもの」であるから、誘惑に遭ったときには「目を覚まして祈れ」というキリストの勧めを思い起こさせるのも聖霊です。（マテオ26・41） エフェソ人への書簡の中でこのキリストの勧めが励ましとなってこだましています。「すべての祈りと願いをもって心のうちでいつも祈れ。絶えず目を覚まして、忍耐強く…祈れ。福音の奥義を恐れなく告げようとして話す時、適当な言葉が下されますように。」（エフェソ6・18～19） 誘惑を退け、人間の弱さの餌食にならず、受けた使命に正面から取り組むために祈らなければならないことをパウロは知っていました。パウロは自分に与えられた使命、つまりキリストと福音を全世界に、とくに異教の地において証しすることをいつも心に留めていましたが、時には劇的にそれに気づくこともありました。「霊は私のものを受け、それをあなたたちに知

らせる」と、イエズスが真理の霊について語っておられるように、パウロは、自ら行なうこと語ることは真理の霊の働きであることを知っていました。(ヨハネ16・14) 福音の宣教を通して、「キリストに光栄を帰す」ために聖霊は「キリストのもの」をお使いになりました。それゆえ、キリストとその霊のつながりのなかに、御父との一体の秘義の中に入ることによってのみ、同じ使命を実行することができるのです。そして、この一致に至る道は、聖霊が私たちの中に注がれる祈りです。

深い洞察力を示す言葉で、パウロはローマ人への書簡に「霊も私たちを弱さから助ける。私たちは何をどういうふう祈ってよいかを知らぬが、霊は筆舌に尽くしがたいうめきをもって、私たちのために取り次いでくださる」と記しています。(ローマ8・26) 「切なるあこがれをもって神の子らの現われを待ち」「腐敗の奴隷から解放されて、…自由にあずかれる」ことを希望し、「今まで嘆きつつ陣痛の苦しみにあっている」全被造界の底から出る同じようなうめきをパウロは聞いたのです。(同8・19、21～22) このような歴史的、霊的な背景の中で、聖霊の働きが続いています。「心を探るお方は霊の意向を知りたもう。すなわち、霊は神の聖旨に従って聖徒たちのために取り次がれる。」(同8・27)

これこそ祈りの核心です。聖霊は、祈りを勧められるだけでなく、私たちの中で祈ってくださるのです。

三位一体の各ペルソナ間の関係を見事に表す祈りの源に聖霊はおられます。賛美と感謝の祈りを通して、御父は栄光を受け、御父と共に御子と聖霊も栄光を受けられます。聖霊降臨の日、使徒たちはこの賛美と感謝の祈りを唱えました。その時、彼らは「神の偉大なわざ」を宣言したのです。(使徒行録2・11) 百夫長コルネリオの場合も同様でした。ペトロが説教していると、そこにいた人々は「聖霊の賜」を受け、「神を賛美」しました。(同10・45～47)

パウロは初代教会の共同の遺産となったこの最初のキリスト信者の体験を通して、コロサイ人への書簡で祈り続けよと勧めています。「キリストのみ言葉をあなたたちの中に豊かにすまわせ」祈りにとどまり「心の底から、恩寵によって詩の歌と賛美の歌と霊の歌をもって神をことほげ。」そして、「あなたたちが言葉と行ないをもってすることすべて」においてこの祈りの生活を続けるよう要求しています。「キリストによって、父なる神に感謝しつつ、主イエズスのみ名によってすべてを行なえ。」(コロサイ3・16、17) 同じような勧めがエフェソ人への書簡でも示されています。「霊に満たされよ。ともに詩篇と賛美…をととなえ、心を挙げて主に向かって歌い、そして賛美せよ。主イエズス・キリストのみ名によって、すべてのことについて、絶えず父なる神に感謝せよ」と。(エフェソ5・18～20)

こうして私たちはパウロの教えと勧めに従って、三位一体の神への祈りに戻ります。聖霊がこの祈りを勧め、心の中にそれを形成してくださることに気づきます。聖人や神秘家、キリスト教の時代に発展した霊性の潮流や学校の「祈りの生活」は、初期共同体の体験でした。教会の典礼も同じ線上にあります。たとえば、「主の大いなる栄光のゆえに、主に感謝し奉る」と歌う栄光の賛歌などに見事に表されています。「テ・デウム(感謝頌)」では、神を讃え、主を宣言します。また、叙唱ではつねに、「主に感謝を捧げまし

よう」と唱え、「まことに尊く大切なつとめ」と続けます。祈る教会に合わせてこう繰り返すことはまことに美しいことです。各詩篇の終りに栄唱を唱えるのも本当に素晴らしいことです。「父と子と聖霊に栄えあらんことを。」

私たちの中で、私たちのために祈ってくださる聖霊の働きのもとで、三位一体の神を賛美する言葉が心中で湧いてきます。続いてそれは、個人的な願い、共同体全体の願いがこもった賛美の歌声となってほとぼしり出ます。神を愛する魂の祈りは自然に言葉となり、歌となります。それは最初のキリスト共同体以来、教会ですつと行なわれてきました。聖アウグスティヌスは「聖アンブロジウスによってミラノの教会に歌が取り入れられた」ことを伝えています。（『告白録』 9, c. 7 PL 32, 770参照）そして「歌が甘美に響き、感動に動かされ」、涙を流したことを回想しています。（同 9, c. 6 PL 32, 769参照）楽器が「感情を高揚させる」とき、音（音楽）も神を讃えるのに大きな役割を果たすのです。

（聖トマス・アキナス 『詩篇詳解』 32・2） 「美しい旋律によって神への心がかきたてられる」のですから、教会の典礼で歌われる歌や演奏される音楽の価値は尊重されなければなりません。（『神学大全』 II-II, q. 92, a. 2、『告白録』 10, c. 22 PL32, 800参照）

聖アウグスティヌスはその著書『告白録』で述べていることを、私たちも典礼の音楽を耳にする時に体験するでしょう。「神よ、どんな歌を歌いましょうか。ダビデの詩篇を朗読するとき、信仰の賛歌、敬神の歌…。どんな歌を歌うことになるのでしょうか…。あなたへの愛で心を燃やし、できれば全世界に向かって朗唱したいことでしょう。」（『告白録』 9, c. 4, n. 8） こういうことはすべて、聖霊の内奥の働きに従うとき、一人ひとりの魂、共同体の魂に起きることなのです。

※ 聖霊シリーズの他の沢山のカテケージスは省略されています。

たとえば、聖霊降臨（ペンテコステ）の出来事について、聖霊とイエズス・キリストの生涯について、教会を導く聖霊について、聖書に記される聖霊について、私たちの信仰・平和・喜びの源である聖霊について、など。